

FFJ MAGAZINE LEADERSHIP

リーダーシップ

全国9万人! 農業クラブ員の情報誌



2016
秋号

■インタビュー

埼玉西武ライオンズ

栗山巧選手

特集1

熊本地震レポート

特集2

第67回 農業クラブ全国大会

大阪大会ガイド

■農高ブランド

まるわかり!

石川県立翠星高校

■農業高校は日本一

沖縄県立八重山農林高校



渡久山修校長のあいさつなどがある開会式

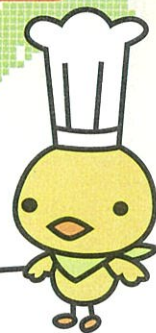
今の時代、都会で生まれ育った人には想像もつかないことかもしれないが、島で生きるということ、何でもそろっているわけではない不自由さのなかで、人の手を、知恵を、工夫を出し合い、自分たちの身体を動かしてものをつくるということだ。

多くが八重山諸島（石垣島、竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、波照間島、新城島、西表島、由布島、与那国島）出身という八重山農林高校の生徒たちは、島々で、農や漁、それらの豊作、豊漁を祈る祭事芸能に、幼いころから親しんできた。

昭和12年（1937）の学校創立以来の伝統行事が「草刈り大会」だと聞いて、「しんどそう……」というイメージばかりが膨らむのは、街的な発想なのかもしれないと、

山を貸し切って開催する 学校創立以来の伝統行事

農業高校は 日本一



東京からの距離は約2000キロ。沖縄本島からも約400キロ。八重山農林高校は八重山諸島に浮かぶ石垣島にある。独自の文化が花開く島の農業系高校生とは……。「草刈り大会」「中学生対象の八重山農林高校見学ツアー」という字面だけでは平凡に思えた催しは、話を聞けば聞くほど独特でユーモラスだった。

優勝者には 金の鎌

「草刈り大会って言ったたらうっきりする！」

沖縄県立八重山農林高校

生徒たちの眼を見て思う。

彼らはこう言って、笑いとばした。

「草刈り大会って言ったたらうっきりするんですよ！ 運動会の前の日みたいな感じで、眠れない。飛行場から見えるカラ岳っていう山があるんですけど、そこを貸し切って、農林高校がここで草刈り大会をするので草を刈らないでくださいという看板を立てます。当日はみんな、先生も、バスに乗って行って、校長先生のヨイドンの合図で、山の草をひたすら刈る。優勝した人には金の鎌が贈られるんです」



さまざまな「仕掛け人」でもある校長



今日は私が学校を案内します

ライフスキル科3年
嶺井 千裕さん



本気の生徒は 「マイ鎌」で参戦

草刈り競技は午前の1時間40分と、午後1時間10分。本気の生徒たちはふだん家で使っている「マイ鎌」を手にしている。

「楽しくてごはんの時間まで刈ったりする人も。先生から『食べなさい』って怒られたりするんですけど(笑)。達成する喜びと、自分との戦い。しんどいんですよ。腰がくだけそうになったり。もうやばいとか言いつつ、あと何分、あと何分…がんばらないと金の鎌が…」と篠田楓さん。

「今年は1年4組が基準量(1年生は男子30キロ、女子20キロ)を全員達成したのが特別賞がありました。クラスの団結力もできますし、鎌一本で何キロ刈ることができるとかという昔の農業体験にもなる。それに刈った草を、授業で畑のマルチングとして使い、草が生えてくるのを防止したり土壌改良材として畑に鋤き込んでいるんですよ。これは自分たちが刈った草じゃないか、3年目にして70キロの草を刈り、金の鎌を受け取った嶺井千裕さん。

今年は熊本の震災募金につなげる仕組みをつくった。刈った草の総量を1キロ＝1円として募金してほしいと島内と呼びかけ、総額約13万円を寄付した。

「飛行場から小さい山が見えますよ。今、禿げている部分がうちの学校が草刈り大会を開催した場所です。見て帰ってください」

東内原聖子先生は誇らしげに言った。



今年は213キロの草を刈った2年生男子の優勝者



見学ツアーは農業クラブ役員が中心になって準備・開催した

中学生たちの 偏見を変えたい

「私が中3に戻れるなら、迷わず八重山農高を選びます」という大人の声を聞いた。学校を訪れたことのある人、農業祭で生徒とふれあった人には、八重山農林高校のイメージは十分に伝わっている。が、中学生たちには「この学校、けっこう悪く見られてるんです…」と新城舞さんは話す。

「私もずっとヤンキーがいる学校と思ってるんですけど。そういう偏見持ってる人が絶対いるんですよ。偏見を変えたい。入学したいと思う学校だよって知らせるために」7月に初めて中学生を対象にした「八重山農林高校見学ツアー」を開催した。

大型バス1台分の50人を予定していたが、参加者は予想をこえて62人。学校外にある農場や施設を見学した後、学校で育てた生産物を食材に、バーベキューとお弁当をふるまった。おむすび、キュウリの浅漬けはアグリフード科がスイカはグリーンライフ科が、お肉はフードプロデュース科、みかんのゼリーはライフスキル科の調理コースが担当したと聞いて、中学生たちは何を感じただろう。



午後からは、意見発表とプロジェクト発表（テーマは次の3つ。「父の一言 経済動物に情をもつな」「石垣島で魅力ある畜産経営をめざして」「波照間産もちきびだんごを食卓へ」と授業見学。造園技術検定、園芸装飾検定の検定シーンなど、資格を取得できるという場面も見せた。

これらを農業クラブの生徒が企画・進行的なことで「今まで自分の学科しか知らない部分もあったんですけど、下見をしていくなかで、2年以上通っていてもわからなかった自分の学校のことをあらためて知ることができた」と嶺井さんは言う。

中学生のアンケートには、「臭い、きつ」というマイナスなイメージだったけど、臭くなくてきれいだったし、おもしろそう」「二人ひとりが楽しそう」「農高に入学したいです」などの文字が記されていた。

「自分たちが毎日食べられるのは、暑いなかで辛い作業をしてくださってる人たちがいるからです。ニワトリも育てて解体するのですが、残酷だけど食に対するありがたみを、入学してからずっと学んできました。見学ツアーで中学生に一番感じとってほしかったそういう部分を見てもらえたのは大きくなって思いました」と篠田さん。

新城さんはもう次回のことを考えている。

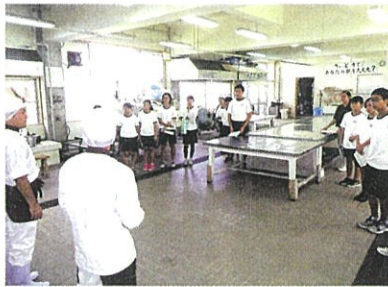
「1回目なので反省点もいっぱいあるんですけど、その分、またやりたいな、次はあーやろう、こーやろうっていうのが出てきています」



「生徒一人ひとりが楽しそう」と中学生



ライフスキル科の園芸装飾検定後の見学



校外外にあるあらゆる施設を見せた



お弁当の食材は学校で育てた生産物



農業クラブ役員

左から

- 平得 永太さん (グリーンライフ科)
- 篠田 楓さん (ライフスキル科)
- 嶺井 千裕さん (ライフスキル科)
- 新城 舞さん (ライフスキル科)



農業とリンクした踊りも多く、そのために田植えなどを体験することも

こんな活動もしています！

●ハワイ公演も経験した
郷土芸能部

八重山の島々で育った人にとって、郷土芸能は守り残すべきと肩肘はるものではなく、暮らしのこく身近にあるもの。

現在の郷土芸能部の部員25人のほとんどは、中学までは運動部に所属していたという。でも子どもの頃から祭事などで目にしてきた「楽しそうな」「かっこいい」先輩たちの姿に憧れて、入部した。

郷土芸能の踊りには農とリンクするものももちろん多い。石垣島にあるどの高校でも郷土芸能部は盛んだが、「豊年祭」では八重山農林高校の生徒が舞踊を神様に奉納する。

「島なので、地域と近い。何かあれば呼ばれて活動しに行くのが当たり前だし、応えようという気持ちでやっています。生徒も地域全体で育ててもらっています」と、東内原先生。

八重山地方の芸能レベルの高さは、ぜひ石垣島に出かけて感じてほしい。

農の分野以外の人たちと コラボレーション

八重山農林高校ののびのびとした空気のなかにさらに風を吹かせているのが校長だろ。

お隣の八重山商工高校出身で、専門は電気。21年間、その分野で教鞭をとった。

「まったく農業畑じゃない。だからおもしろいんですよ。今の農業はメカニク的なものを取り入れた農業に変わっていますよね。農業のみなさんは農業はよく分かっているけど、機械をもっと効果的に活かすためにどうしたらいいかっていうところまでいっていないという部分がある。電気も、機械も、ITも取り入れないと、効果的で、安全で、生産効率のいい農業にならない。工業の目から見るとわかるわけです。この人たちが社会に出た時には、いろんな業界の人たちとコラボレーションしながら自分

インタビュー

人は誰かの 苦勞のなかで 食べることができる

フードプロデュース科
東原 聖子先生
(八重山農林高校 畜産科卒)



■八重山農林高校の特徴は？

平成25年(2013)に学科を改編し、4学科2系列8コースになりました。農業系高校というのは普通、1年生から各コースに分かれると思うのですが、八重山農林高校の1年生は学科の枠を超えたクラス編成「ミックスホームルーム」という形をとり、4学科(アグリフード科、グリーンライフ科、フードプロデュース科、ライフスキル科)の基礎を学ぶことになります。生徒が言っていたように、例えば1年生の全員が実習すると畜でこんな声があります。「鶏の首を切った瞬間に肌で感じたことは強く印象に残っていて、今でも血のどろどろさや生暖かさを憶えている」。いろいろな授業を学べる経験は2年、3年になった時に糧になっているようです。

■生徒に学んでほしいことは？

人は「誰かの苦勞のなかで食べることができる」。私は専門が畜産で、と畜して解体する時には胸が痛むのですが、これをやらないと食べる資格はないとも思っています。命に対しての感謝。それは牛豚鶏だけでなく、野菜にも、花にも。生きているなかでの教材があって、自分たちが学べる。そういうところは常に伝えていきたいと思っています。そして生きていくなかで基本になるあいさつや、気遣い、人への思いやり、おもてなしの心を身に付けてほしい。また農業の分野だけを見るのではなく、地域で考えた時には水産もあるし、商業も、観光も視野に入れながら、農業がどうあれば八重山の産業を盛り上げていけるのかということ。例えば、赤土で海を汚してしまうことは環境とリンクするし、農業でいいものをつくっても商業として考えた時にはどうしていけばいいか。そういうことを常に意識しています。

■どんな進路指導を？

2年生からは生徒の希望で、進学系か就職系かという進路を見据えた系列、AS(アグリスペシャリスト)、AT(アグリテクニカル)に分かれます。この学校の特徴として、進路指導は担任や進路指導の先生だけに任せるのではなく、全職員で3年生の全生徒を2~3名ずつ担当し、面接や論文、履歴書などの指導をします。3年間何を学び、やってきたかをしっかりアピールしなさいということで、面接には力を入れます。生徒一人ひとりをよく知ってこそ、いい引き出しを出せると思っています。

このコーナーでは、毎回1校、農業クラブの生徒たちが自分の学校を紹介してくれる話を聞かせてもらいに、何かしらの「日本一」を持つ農業系高校におじゃまします。「日本一名前が短い」「日本一夏が暑い」など、自分たちが「日本一」だと思えば、それでOK。「うちは日本一〇〇な農高なので来てください」というご連絡を、ぜひ編集部まで！※宛先は48pをご覧ください

の6次産業というものをやっていくので、そういうことを学校のなかでもっと刺激したい」

だから校長は出かけた先でもおもしろい人に会ったら、すぐに出前授業や講演を交渉する。

「植物スピーカー」と言われるカークリコプロジェクトもそんなフットワークの軽やかさのなかで動きはじめた。

「開発をした古賀さんという人もジェット機のエンジンアなんです。ANAはジェットエンジンを燃やしてCO₂を排出しているんで、少しでも環境への貢献ができないかというのが彼の発想の源。音の出る葉っぱを世界じゅうで探して、音が出せるようにするために研究して、市販できるような値段まで開発をする。これを広げるには高校生たちの若いアイデアが必要だということ、飛び込んできた話だから。夢があるなあと思っています」

全国にある農業系高校のうち、離島に立



「植物スピーカー」カークリコの栽培

「普通のスピーカーって音の発生源がわかると思うんですけど、カークリコは本当にわからなくて、見えないところから音がふわっとおとってくるみたいな感じなんです」と平得永さん。

「植物スピーカー」はANAの古賀敬司研究員が発明したもので、CDデッキなどの出力を振動に変換し、植物の葉や花から音が出るようにした装置だ。特に大きな音を響かせるカークリコを、新たな農産物として、栽培技術習得や増産、販売に取り組むことになった。西表島でカークリコを栽培する「西表ジャングルファーム」から100株の提供を受け、グリーンライフ科が栽培を担当している。

八重山農林高校ではスピーカーとしての価値以上に、赤土の流出を防止する植物として注目。実験の後、地域に還元する計画だ。

地する学校は12校。そのうち沖縄(沖縄本島を含む)が6校だ。離島全体のことでいえば、島ちゃび(離島苦)と表現される言葉もあるが、八重山農林高校の人たちにふれていると、農と生命、新しい発想を学ぶ環境はどこよりもゆたかだと感じる。



沖縄県立八重山農林高校

【沿革】昭和12年(1937) 沖縄県立八重山農学校として開校
昭和20年(1945) 公立八重山農学校と改称
昭和21年(1946) 公立八重山農林高校と改称
昭和47年(1972) 本土復帰により、沖縄県立八重山農林高等学校に改称
平成25年(2013) 熱帯園芸科、緑地土木科、畜産科、食品製造科、生活科学科を、アグリフード科、グリーンライフ科、フードプロデュース科、ライフスキル科に改編
【所在地】〒907-0022 沖縄県石垣市大川477-1
【学科】アグリフード科、グリーンライフ科、フードプロデュース科、ライフスキル科